



「褒める」について考察

褒めるところがないのではなく、それはあなたに原因があるのです。

校長による令和8年度の学校経営方針の中に、「3. 事前指導=褒める種まき」とあります。生徒を褒めることのできる仕掛けや関わりが必要であると示されています。ただ、私は以前から褒めることに苦手意識を感じていました。特に若い頃は、生徒の至らない部分ばかりに目がいたり、心にもないことを口先だけで褒めたりしていました。（褒めたとは言えません。）

生徒が落ち着かず褒めるところがない。

これが正直な気持ちでした。（生徒が落ち着いていないのは自分のせいですが、当時は「生徒が」落ち着かないと思っていました。）今になって思うのは、生徒に褒める部分がないのではなく、私が生徒のよさを見つけられなかっただけということです。「中学生とはこうあるべきだ」という自分の物差しがあって、その物差しに合わない生徒がいると、自分の物差しに合わせようとする。矯正すると言った方がしっくりきます。こういう考えでいては生徒を注意することはあっても褒める言葉なんて出てくるはずがありません。

まずは生徒を一人の存在として認めてありのままを丸ごと受け入れる。

これは私が担当する教科「美術科」が最も大切にしてきたことです。人それぞれの個性や価値観に優劣はもちろん正解不正解もないので、自分が認めることができる感性を持ち合わせているかないかだけです。「美はあなたの目の中に」美しいと思って見るから美しいのであって、対象が美しいかどうかはもはや問題ではない。美しいと思えば道端に転がる石ころだって美しい。生徒の

作品からよさや美しさを見つけることが少しずつできるようになってきてようやく気付いたことでした。（参考資料：裏面に）

※以前は自分の学校の生徒作品を、絵画コンクール等に何が何でも入選させたいと躍起になっていましたが、今考えるとただ単に自分が見栄を張りただけだったのかもしれませんが。現在はそういう気持ちもずいぶん小さくなり、今、美術の授業がとっても楽しいです。

平成17年の12月2日に、当時27歳の私は、合志市の中学校に勤務していました。美術の研究発表会のため、勤務校を離れこの菊池北中で当時の2年生に美術の授業を5回〜6回ほどしたことがあります。今と違って複数クラスあったので、何組で授業をしたかは忘れましたが、水墨画の授業をしたことを覚えています。

あの時の2年生も今はおそらく35歳くらいでしょうか。私があと数年菊池北中に勤めることが叶えば、保護者として再会できるかも…と期待しています。

21年前の北中で



平成17年当時。机も椅子も美術室も当時のまま。入選させることに躍起になっていたとき。（反省）